

# 英語ライティングの Peer Review

-ICT を活用した相互評価-

英語科 加古久光

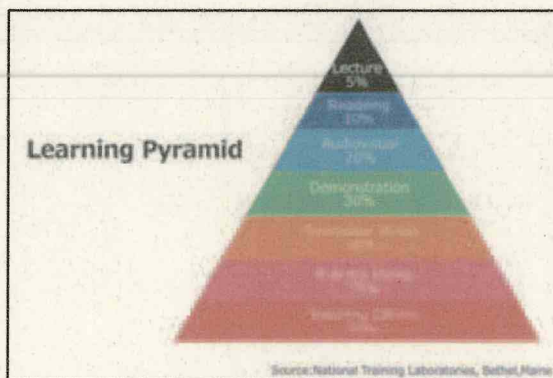
昨年度 3 学年を対象に行った Peer Review の活動を今年度は 1 学年を対象に継続して行い、昨年度で課題としてあがった全体でのフィードバックをより充実するために ICT を利用した。ICT を利用することで、各グループの意見の共有をより効果的に行うことができ、議論へと発展させることができた。また、Peer Review の活動自体も、3 年生と比べて 1 年生でも大きな差がなく効果があることがわかった。

〈キーワード〉 Peer Review、ICT、フィードバック

## 1. 経緯と目的

昨年度、英語の表現の定着と語彙・文法使用の正確性を求めて、授業内で英語ライティングの Peer Review の活動を取り入れた。これは、クラスメイトが書いた文章をグループ内で話し合い、教え合いながら添削していく活動で、この「教え合うこと」を取り入れることで「定着と正確性」を身につけさせる狙いがあった。これは Edgar Dale(1946)の "Audio-Visual methods in teaching" の中で出てくる考えを基にして作られたラーニングピラミッド (右図) を利用しており、それは知識の定着を図る上で「他人に教えること」が最も効果があると実証している。

昨年度は 9 ヶ月間この活動を繰り返し行うことで生徒への「定着と正確性」の向上効果はあったものの、活動自体はグループ内のみで終わっていたために、その班独自の見解で終わり、全体での知識の共有や更なる深い理解などを行うことが十分にできていなかった。その反省を生かすために、今年度はグループ内で Peer Review を行った後に、全体に向けてのフィードバックの活動を充実させていく。また、生徒の発表の効率性を求めて ICT を活用して行う。今や現代の社会において ICT 機器はなくてはならないもので、いずれ生徒たちが進学や社会に出たときに ICT を利用した発表をする機会がある。それにすぐさま対応できるようにさせる目的もある。

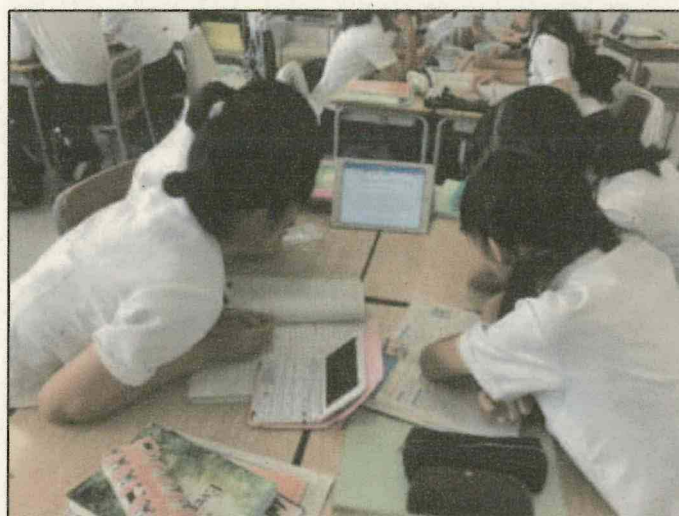


## 2. 研究対象と方法

対象生徒は担当している 1 年生の 2 クラスで、英語表現 I の授業内で行った。レッスン毎に新出の語彙と文法があるため、生徒にはライティング時にそれらを含んだ文章を書くように指示してある。Peer Review の活動時には、既習事項に加えて、新出事項の使用方法が正しいかどうか話し合うようにも伝えている。また、昨年度同様今年度もライティングの中で出てくる表現や意見に対してよい点や参考にした点なども記入するようにと伝えてある。文章を二つの視点から見ることで文章を読む視野を広

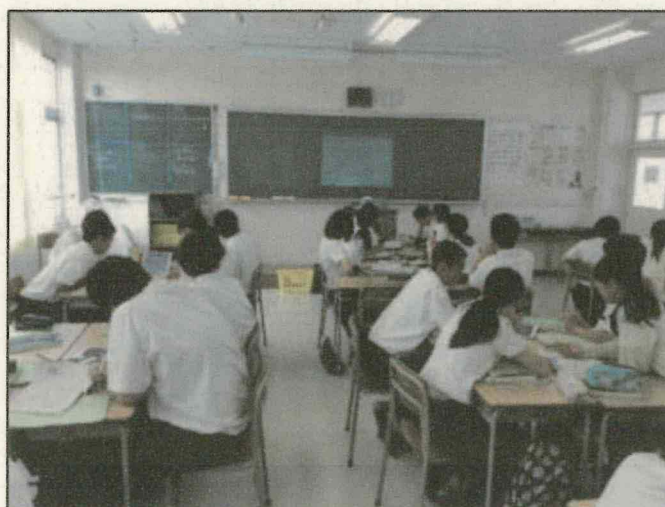
げていきたい。

フィードバックの方法としては、他の生徒が書いた文章をデータとしてタブレット内に入れておき、タブレットを各グループに配付する。生徒はタブレット上でそのライティングを添削した後に、プロジェクターと接続して、添削内容を発表する。他のグループはその発表に対して、意見を言い合う。



(写真) タブレット上で添削をしている様子

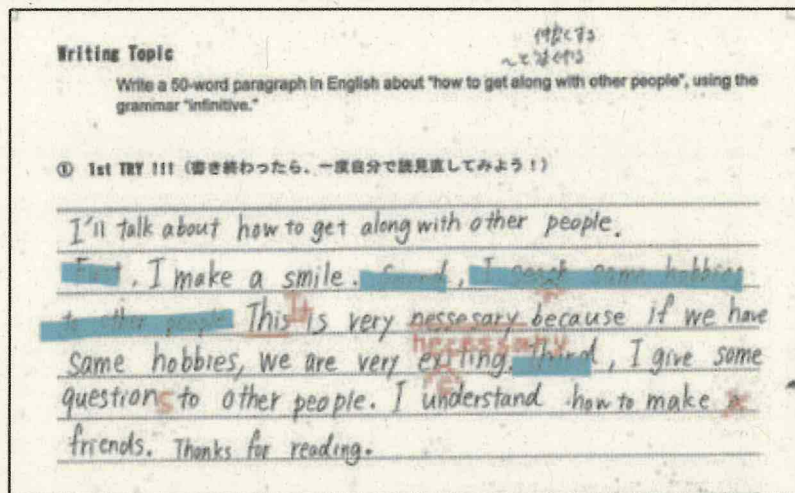
発表方法として気にした点は、発表する班がその場（椅子に座ったまま）で発表できるようにさせたことである。タブレットとプロジェクターを無線で接続させることによってその場で発表することが可能になった。通常の発表だと発表者はクラスの前に出て、自分たちの発表内容を伝えることが多いが、その場合だとクラスの構成としては発表者と聴衆という形で二つに分かれ、内容に対する意見や質問も発表者と聴衆とでの交換になりやすい。しかし、この座ったままでの発表方法だと、他の生徒の視線は黒板のプロジェクターの映像に行き、発表者も発表というよりは自席から意見を提言している形となり、他の生徒から質問や疑問があっても、その回答を発表者だけではなく、他の生徒がそれについて答えることも可能とさせる。この方法により、一つの発表から内容についての意見を多くの生徒と交換することができ、深い学びへと変えていくことができる。



(写真) 発表の様子。発表者が説明している間、他の生徒の視線は黒板の映像に向かう。

### 3. タブレットを使用した添削

昨年度までは各グループに他の生徒が書いたライティングを用紙で配り、それに添削や意見を書き込み、回収して元の生徒に返す方法で行っていたが、今年度はタブレット上のデータに添削や意見を書かせた。

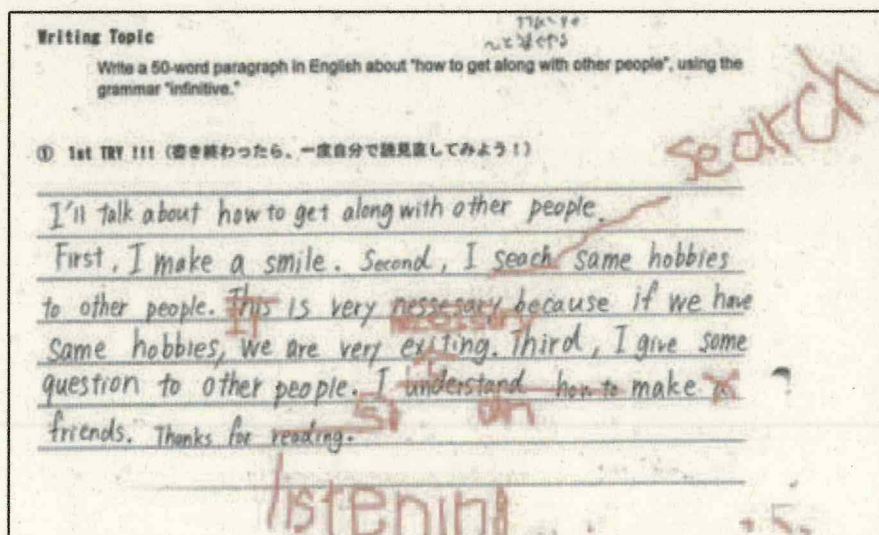


タブレットでの添削。良い点をマーカーペンの機能で示している。

生徒たちはタブレット上に字を書くということで、不慣れな部分もあったが、操作等はすぐに理解し、取り組むことができた。今回は使用したタッチペンがやや正確性を欠いていたため、使いにくさを感じる生徒もいたが、これからの ICT 技術の発展が性能をさらに良くしていくことだろう。添削したことを記入する方法では、字の色や太さを変えることや、間違えてしまった場合はそれを消すこともタブレット上なので当然行いやすい。また、生徒たちが添削したデータも一括で管理しやすいので、ICT を利用することでデータ処理の効率性が上がるのがよくわかる。

### 4. 1年生の Peer Review 活動

昨年度の取り組みの中で、この Peer Review 活動は3年生だから（多くの語彙や知識を持っており、文法事項は既習だから）行うことができると感じることもあったし、またそのようなご意見をいただくこともあった。だから、今回1年生を対象として、どこまでこの活動を発展させることができるのか不安な部分もあった。しかし、実際に活動をしていくと、その取り組み方法は昨年度の3年生と大きく変わらないことが分かった。



例えば、上記の Peer Review を見てみると、スペルミスや複数形の前に不定冠詞が付いていることへの指摘があることがわかる。これらが Peer Review 活動の根幹で、これらの指摘を他の生徒に教えることによって知識の定着へと結びつけていく。これらは1年生の他のグループでも見ることができたが、ここのグループが取り組んだのは、内容に合わせて文章を添削したことである。文章内の3番目の理由として、"I give some question to other people. I understand how to make a friends."と書かれていたのを、より理解しやすいように、後半部分を"So I can make friends."に変えている。このような、内容を添削することは、この Peer Review 活動の発展的な取り組みで、作者の意図が十分に理解できなければ行うことができない。また、この活動ができることによって、フィードバック時に内容について触れることができ、作者の意見についても全体で共有することができる。

## 5. まとめと今後の課題

1年生でこの Peer Review の活動をしていて、語彙の定着や文法表現の正確性を身につける点で、3年生と比べてレベルの差はもちろんあるにしても、十分に効果があったと確信している。そして、内容に関する添削やその意見を伝えることができたグループもあり、発展的な活動を行うこともできた。今回のテーマは、フィードバックの充実を求めての ICT 機器の利用であった。生徒の発表の効率、教師側のデータの処理方法を考えると、これらを利用することは十分に意味があった。ただ、当然ながら普段の準備とは異なるので、教師側の負担はある。

発表においても、自席から行うことができたので、様々なグループから意見を聞き、話し合うことができた。ただ、その議論が質の良いものかという点、そこには疑問が残る。これは ICT の利用というより、普段から議論を行ってきたかどうかで、その練習の場が必要だと感じた。ICT で効率を上げることも大切だが、根本的な活動を行うことが何よりも大切だということを改めて認識した。今後としては、この Peer Review の活動、そしてフィードバックの場を与えるのと同時に、ディスカッションを行える技術を高めていき、この活動の中でより良い意見交換を深めていきたい。

## 参考文献

文部科学省「高等学校学習指導要領 外国語編・英語編」(平成21年12月)

Edgar Dale (1946) Audio-Visual methods in teaching NY: Dryden Press 37-52

加古久光 (2017)「英語ライティングの Peer Review -アクティブラーニングの一形態として-」研究紀要第44号、pp. 95 - 100